論　文　要　旨

Clinical Implications of Elevated Serum Interleukin-6 in IgG4-Related Disease
（IgG4 関連疾患における血清インターロイキン 6 上昇の臨床的意義）

関西医科大学内科学第三講座
（指導：岡崎　和一教授）

津　久　田　　諭

【前書き】

IgG4 関連疾患（IgG4-RD）の一部の患者は、過剰な炎症反応または再燃を繰り返し血清インターロイキン（IL）-6 の上昇を示す。これまでに、IgG4-RD 患者の血清 IL-6 上昇の臨床的意義に関する報告はほとんど発表されていない。今回の後ろ向き研究の目的は、IgG4-RD 患者における血清 IL-6 上昇の臨床的意義、IL-6 が疾患の活動および/または再発を予測できるかどうかを調べることである。

【材料および方法】

当院で IgG4-RD と診断され、ステロイド治療前に血清 IL-6 を測定できた 43 人の患者の発症時の臨床像を調べた。

【結果】

血清 IL-6 の中央値は 2.2 pg / mL でした。 IL-6 と C 反応性タンパク質（CRP）レベル（r = 0.397、p = 0.008）、ヘモグロビンレベル（r = -0.390、p = 0.010）およびアルブミンレベル（r = -0.556、p <0.001）の間には有意な相関を認めた。43 患者を 4 pg / mL のカットオフ IL-6 を使用して 2 つのグループに分けた場合、高 IL-6 グループは年齢が高く、アルブミンが低く、CRP が高く、アスパラギン酸アミノトランスフェラーゼ（AST）が高かった（年齢 p = 0.014 、アルブミン p = 0.006、CRP p <0.001、AST p = 0.009）。肝臓の腫脹および脾腫は、低 IL-6 群よりも高 IL-6 群で有意に多かった（肝臓 p <0.001、脾臓 p = 0.020）。胆道の関与は、高 IL-6 グループでより多く認められる傾向にあった（p = 0.060）。

【結論】

IgG4-RD の発症時の血清 IL-6 レベルは、臨床的炎症パラメーターと有意に相関している可能性があり、胆管、肝臓、および脾臓の関与とも関連している可能性がある。